

悪役令嬢になりたいのにヒロイン
扱いってどういうことですか!?

リアーヌ

侯爵令嬢。
自信家で気が強く、
リリーを目指す
「悪役令嬢」を
地で行くタイプ。

エステル

救済校で入学した、
貧民街出身の転入生。
非常にしたたかで打たれ強く、
巧みな立ち回りを見せる。

セドリック

リリーやクロヴィスの
幼馴染で、騎士見習い、
またクロヴィスの護衛。
フレデリックの双子の兄。
いつもにこにこ笑みを
浮かべているが最も腹黒い。

フレデリック

リリーやクロヴィスの
幼馴染で、騎士見習い、
またクロヴィスの護衛。
人の話をまぜっかえすような
発言も多いが、リリーにとって
気の置けない友人。

リリー

悪役令嬢に憧れる公爵令嬢。
幼い頃からクロヴィスと
婚約していたが、
少し前から婚約解消を
予感しており、いざ破棄された
時も笑顔で受け入れた。
悪役令嬢小説を
バイブルとしている。

クロヴィス

リリーの元婚約者で王子。
ある日リリーに婚約破棄を
突き付けたが、とある理由から
婚約破棄の撤回を
掲げてついて回るように。
自分にも他人にも厳しい性格。

登場人物紹介

プロローグ

「リリー・アルマリア・ブリエンヌ」

「はい」

幼い頃より決められた婚約者からソレを言い渡される、待ちに待ったこの瞬間。

「お前との婚約を破棄する」

「はい！」

リリーは喜びの笑みを隠せなかった。

「お前は一体何を考えているんだ！」

父フィルマンの怒鳴り声がキーンと響き、耳鳴りを起こす。騒音とも呼べるその怒声に、リリーは目を閉じたまま思わず眉を寄せた。

学園のどこかに、父親直通の情報パイプがあるに違いない。そう疑いたくなるほど、父親の耳に入るのは早かった。

「お父様、室内にいますから、そのように声を張られずとも聞こえておりますわ」

「聞こえていても理解せねば意味がないだろう！ この馬鹿娘！」

愛しい愛しいと頬ずりをしてくれたのは遠い昔の話。今では頬ずりもなければ頬へのキスもなし。あるのは屋敷中に響き渡る怒鳴り声と、血圧の上昇を知らせる赤い顔、そして蛇よりも鋭い睨み。あまりの勢いに、テーブルの上に置かれた紅茶が揺れ、こぼれそうになる。それを、カップを持ち上げて防いだ。

「モンフォール家との破談が、ブリエンヌ家にどれほどの被害をもたらすことになるのか、わかっているのか！」

「そのようなことをおっしゃられましても、破談されたのはわたくしの方ですし」

「言い訳はいい！ お前はその時、泣くでも縋りつくでもなく、笑顔だったというではないか！」
間違いない父親のスパイが学園の中にいる。

「驚きと悲しみで涙も出ませんでした。ほら、言うではありませんか。人は悲しみのあまり笑ってしまふと。わたくしもそれと同じ状態で——」

「嘘をつくな」

娘の言葉を毛の先ほども信じていないその親心、娘ながら大変素敵ねと嫌味の一つも言いたくない。顔を背け、いかにも悲痛な面持ちで口を押さえたのは芝居くさすぎたかと、リリーは表情を戻した。

「周りには大勢の生徒がいたのです。その場で泣き崩れて縋りつくなど、それこそブリエンヌ家の恥だと思いませんか？」

「むしろブリエンヌ家のためを思うなら、憐れっぽく泣いて縋りつくぐらいはできただろう！ 相手は王子だぞ！ 公爵家の娘が必死に泣きつくのは何もおかしいことではない！」

「彼は心変わりしたのです！ なぜ婚約破棄を言い渡されたわたくしが責められなければいけないの？」

「お前が彼の心を繋ぎとめておかないからだろう！ お前の努力不足だ！」

これはあまりに理不尽というもの。

確かに誠心誠意尽くしたりはしなかったけれど、彼の自尊心を傷つけたりもしなかった。婚約者として誇ってもらえるよう、成績も言動も気をつけてきたつもりなのに、父はそれを当たり前のことのように言い放つだけ。

リリーの生きている社会の一般論では、男性が心変わりするのは女性のせい、女性の心変わりは女性自身のせい。いつまで経っても消えない女性差別を、ブリエンヌ公爵家の当主が堂々と口にすると嘆かわしい。

「お父様がなんとおっしゃられようと、彼にはもう新しい恋人がいるのです！ わたくしが泣き縋っても彼の心は戻ってきません！」

「努力する前から放棄するな！ だからお前は馬鹿だと言っただけ！」

「お父様の娘ですから、それも仕方ありませんわ！」

リリーはカップを丁寧に置いた後、しかしその丁寧さが意味をなくすほど強くテーブルを叩いて立ち上がる。すると、こぼれた紅茶を拭きにメイドがサッと現れた。続いて父親もテーブルを叩い

て立ち上がり、拭いたそばから紅茶がこぼれる。それでもメイドは表情を変えことなく黙々と掃除を続けた。

父のお気に入りのメイドは、よく躰けられているのだ。

「お話がこれだけでしたら、部屋に帰らせていただきます！」

「まだ話は終わっていない！ 座れ！」

「泣き縋れとおっしゃるのでしたら、答えはノーですわ！」

「待て！ リリー！」

声を荒らげる父を振り切り廊下に出るだけで、どっと疲れが出た。

婚約者がリリーに愛想を尽かして破棄を言い渡したのであれば、泣き縋れることもしたかもしれない。けれど、今回のこれは完全に彼の心変わりで、浮気も同然。その上大勢が見守る中で、隣に婚約者以外の女性を連れ、婚約者に婚約破棄を告げた彼の度胸は大したものだ。

しかし結局は親同士が勝手に決めた婚約。相手に対して愛情など欠片もなかったリリーはなんのショックも受けなかった。公爵令嬢でなくあくまでリリー個人としては、だが。

「そんなことより、本の続きを読まなくっちゃ！」

リリーは最近、日課と言ってもいいほど読書に時間を費やしている。窮屈なヒールを脱ぎ捨ててベッドに寝転びながら読む恋愛小説は格別だ。中でも最近流行の、悪役令嬢が主役の恋愛小説は特別にお気に入り。

「ああ、なんて素敵なのかしら。嫌われようと自分の信念を曲げないところが好きなのよね。イジメ

は良くないけど、ヒロインもたいてい図太い神経してるから悪役令嬢と張り合えちゃうのがまた面白いし、誰かに頼らないと生きていけないような弱いヒロインより、自分を持って生きてる悪役令嬢の方が断然いいわ。好き勝手できない身としては、こういう女性に憧れるのよ」

大勢の前で婚約破棄されようと、泣き喚いて命を絶つわけでもなければ無様に縋りつくこともなく、ただ揚々と、王子を奪ったヒロインをイジメ抜く。そんな性根の腐り方も好きで、既に二十冊以上は読み漁っている。

いつの世も女性には強いのに、自分達の方が有能だと思いつている愚かな男性達が『女は男がいなければ何もできない』などと、勝手なことを口々に広めていった結果が、今の男女差別社会を作り上げている……と、リリーは思っている。

女性には決して弱くない。男性に守られずとも生きていける。裁縫、料理、お菓子作り。物を見る目なんかは男性よりも遥かに肥えているだろう。

それに比べて、男性は剣を持つか馬に乗るか、はたまた威張るかしかできないちっぽけな虚栄心の塊だ。おごり高ぶった男性貴族は一度没落でもしなければわからないだろう。

「また靴を脱ぎ散らかして。淑女としての気品を奥様のお腹の中に置いてきたようですね」

「淑女としての気品をお母様のお腹から取り戻す本なら椅子に座ってお上品に読むけど、悪役令嬢ものはベッドに寝転びながら読むのが一番なの」

いつの間にかリリーの背後に立っていたのは、メイド長のアネット。褐色肌が美しい彼女は、メイドとしては屋敷で一番優秀で、武術にも長けた強き女性だ。

地方で踊り子をしていた彼女を父が連れ帰り、メイドとして雇うという名目で寵愛^{ちゆうあい}していたものの、暫くしてまた地方へ視察に行った際に今度はアネットとは正反対のゆるふわ少女に目を付けたことで、お気に入りから外された憐れ^{あわ}な女。

どんな境遇だろうが、リリーにとっては唯一飾らずなんでも話せる親友のような相手である。

「そんな本ばかり読んでいるのが旦那様に知られたら、全て燃やされてしまいますよ」

リリーは見せびらかすように、教典のような装いの小説を掲げる。

「カモフラージュは完璧。これは私のバイブル！ これから私が悪役令嬢として生きるためのハウツー本！ いくらお父様であろうと燃やすなんて絶対に許さないわ！」

リリーは明日から、婚約者に捨てられた可哀相なリリー・アルマリア・ブリエンヌ“ではなく悪役令嬢リリー・アルマリア・ブリエンヌ”として生きることを決めていた。

突如現れた女子生徒に婚約者を奪われ破談に追い込まれるのはどの悪役令嬢も同じ。まず自分がどん底まで落ちてから、ヒロインへの復讐を目論^{もくろ}むのが王道。まずはそこから。

「どうなさるおつもりですか？」

「初めは、突然破談を言い渡された可哀相なヒロインを演じるの。ただ、こういう本と少し違って、私は元々意地の悪い女じゃないのよ。品行方正に生きてきたつもりだし、成績優秀で容姿端麗。どう考えても王道のヒロインポジションの女でしょ」

「自分で言いますか」

「で、問題なのはそこなの。最初から意地が悪ければそのままでもいいけど、急に性格が変わったよ

うに意地悪をしたって、不自然なだけだし、私の評判も下がってしまう」

「悪役令嬢とはそういうものなのでは？」

アネットの言う通り、悪役令嬢はわかりやすく悪役に徹するから魅力的なのであって、陰でコンソするのは卑怯だし、格好良くない。だが、駆け引きあってこそ面白さというものもある。

一冊の本につき主役は一人であるように、リリーの人生も主役はリリー一人だけ。巻き戻ってやり直しなんてできないし、失敗も許されない。

悪役令嬢として楽しい学園生活を送るためには、練りに練った作戦を遂行する必要がある。

「ゴホン。わたくしなりの悪役令嬢で参りますわ。おーっほっほっほー！」

□元に添えるのは手よりも扇子^{せんす}の方が悪役令嬢っぽいのだが、用意ができていないため今は手で我慢。

「ですが、本当によろしかったのですか？」

「何が？」

「王子との婚約解消です。王子がお嬢様の傲慢^{ごうまん}さに愛想を尽かしたのであれば何も言いませんが、女に奪われたのであれば悔しさもあるのでは？」

アネットの指摘にボカンと口を開けること五秒。リリーは呆れすぎてもものも言えないとばかりに、大きく首を振る。

「アネットはあの新しいメイドにお父様を奪われて悔しいの？」

「旦那様の女好きは天性のものですし、私もあの若さだけが自慢の小娘同様、拾われてきた身です

ので、悔しさなどありません。誰もが通る道だと理解しています」

顔には出すまいとしているようだが、アネットが心の底から悔しがっているのが語気の強さで伝わってくる。

「しかし、王子は旦那様のようなお方ではございません」

「婚約者がいながら他の女にうつつを抜かすような男は等しくお父様と同じタイプだと思うけど。まあ、どうだっていいかな。それにほら、彼のことあんまり好きじゃなかったし。常に自分が正しい俺様人間、世界は自分を中心に回っていると思っっているような傲慢男には興味ないの。だから婚約破棄されて凄く嬉しい！ 悪役令嬢にもなれるしね！」

リリー達の婚約は二人が惹かれ合ってこぎつけたものではなく、親が決めたものだ。恋愛感情は一つもない。

それどころか、リリーは相手の性格に嫌悪さえ感じていた。

「そんなことより、明日のために予習しないと！」

（きつと明日から、彼は“彼女”を傍につけて片時も離さないはず。そして、私の前に立ちはだかつて嫌味の一つや二つ言い放つか、もしくはもう関係ないって態度で無視するか、どっちかはするでしょうね。その時“彼女”は彼の後ろに少し隠れてか弱い女性を演じて見せるんだわ。私の目が怖いとか、何かされそうで怖いとか言っつて少し震えてみたりして。そして、彼はスッと手を伸ばして彼女を守る！）

映像になって鮮やかに浮かぶ光景に、リリーは本を抱きしめてギュッと目を閉じ、興奮に足をバ

タつかせる。

（私はそれを大きく鼻で笑って「男性に取り入るのが得意ですのね。よろしければわたくしにもやり方を伝授していただけませんか？ ああ、できませんわね。天性の才能ですもの」と高笑いする。このプラン完璧っ！）

カッと目を見開き鼻息荒く起き上がると、大きくガッツポーズ。

「完璧なプランですわ！ 自分の才能が恐ろしい！ わたくしはきつと悪役令嬢になるために生まれてきたのかもしれない！ いえ、悪役令嬢として生まれてきたんだわ……きたのですわ！」

悪役令嬢っぽい「ですの」「ですわ」口調にはまだ慣れないが、上手くやるしかない。

「ごっこ遊びもよろしいですが、あまり夜更かしはしないように」

「わかってる……ますわ！」

婚約破棄されてからがスタートなのだ。

そう、明日から悪役令嬢としての生活が始まるのだと喜びに震え、期待に胸を膨らませていた——はずだったのに……

「リリー」

登校したばかりの自分を馴れ馴れしく呼び捨てにする声に振り向くと、二元、婚約者のクロヴィス・ギー・モンフォールが立っていた。

頭脳明晰、容姿端麗、成績優秀、王の座が約束されている王子と、長所を挙げはじめるとキリがない、神に愛された男。

女子だけでなく男子にとっても憧れの存在である彼だが、昨日の今日で何用だと、リリーは笑顔ではなく素の表情を向けた。

「……おはようございます」

「話がある。ついてこい」

リリーが思っていた展開とは少し違う朝だった。

クロヴィスの傍には確かに人がいた。だがそこにいるのは見慣れた騎士見習いの護衛だけで、彼女はいない。

悪役令嬢としての登場シーンは最も重要だ。紙に書き出した嫌味な台詞をまるで舞台役者のように何度も発声練習したというのに、肝心のヒロインがいらないのでは話が変わってくる。

「ここどうぞ」

「ついて来いと言ったはずだが？」

「ここでじゅうぶんですから」

「何か問題でもあるのか？」

なぜ問題がないと思っているのだろうか？

自分から破談にした女を部屋に招いて話す内容とは？

昨日の今日で部屋に來いなどとの口が言うのかと、リリーは眉を寄せた。

こうなったら仕方がない。リリーは作戦を変更することにする。完璧なプランAから、何かあった時のためのプランBへ。

「今更わたくしに何用ですか？ 昨日、わたくしは大勢の前で婚約破棄を言い渡されるといふ、それはそれは酷い羞恥と屈辱を与えられました。あなたにとっては心変わりの結果による当然の行為でしょうけど、それを手紙でわたくしだけに伝えるなどの方法もあったのでは？ なのに、わざわざあのような場所であのようなやり方を……そんな非常識なお方と話すことは何もありませんわ」腕組みをして顔を逸らし、フンツと鼻を鳴らしてみせる。そんなリリーを見る護衛の視線に、少し居心地の悪さを感じるも、引く気はなかった。

「リリーちゃん、気持ちわかるけど、クロヴィスは昨夜からリリーちゃんと話がしたいって言ってたんだよ」

「……はあ？」

「その反応わかるよ、わかる。婚約破棄だって言っておいてその翌朝から話がしたいなんて、馬鹿も休み休み言えって思うよね」

「おい」

クロヴィス同様、リリーに馴れ馴れしく呼びかけるこの男はセドリック・オリオール。オリオール家は代々モンフォール家の護衛をしてきた騎士の家系だ。クロヴィスとは幼馴染だが、家柄のせいもあって従者をしている。

誰にでも、特に女性に優しいセドリックの周りにはいつも、砂糖に群がる蟻のように女子生徒が集まってくる。皆、セドリックの優しさが好きなのだ。

「さほど時間は取らせないだろう。話ぐらい聞いてやれ」

クロヴィスを挟んでセドリックとは反対側に立つ不愛想なこの男は、フレデリック・オリオール。セドリックの双子の弟で、こちらの方が背が高く、がっちり筋肉質な体つきをしている。兄と同じく端正な顔立ちながら、感情表現も口数も少ない故に女子生徒はあまり近付かない。しかし、剣の腕が立つこともあり、意外にも人気は高い。

「時間が掛からないのであれば、こちらでよろしいのでは？ 大勢の前で婚約破棄を突き付けられるのですから、たいていのことはどこでも話せるでしょう？」

「とりあえず部屋に來い。ここで言い合う時間もつたない。それこそ無駄な時間だ」

どうしても学園内の自分の部屋へ呼びたいらしい。人を殴りたい衝動に駆られた時、皆はどうやって抑えているのか学んでおくべきだったと、リリーは自分の勉強不足を後悔した。

無意識に握り込んだ拳を感情のままに振り下ろしてもフレデリックに止められるのは目に見えているし、まだヒロインが出てきていないのに「リリー・アルマリア・ブリエンヌは暴力的」とイメージが変わってしまうのは困る。

だが、リリーは今日からは悪役令嬢なのだ。少しぐらいヒステリーな姿を見せてもいいような気もしていた。

「あなたはもう婚約者ではありませんので、わたくしが言うことを聞く義理はないのですわ。まあ、あなたがどうしてもお願いするのであれば、聞いてあげないこともありませんけど。どうしてもと、お願い、するのであれば」

我ながら少し悪役令嬢っぽいことが言えたと震えそうになるのを堪え、リリーは一人感動を噛みしめる。これで間違いなく悪役令嬢としての第一歩は踏み出せたはずだ。

あのモンフォール家にこんな口を利けるのは、人を敬うことを知らない悪役令嬢か命知らずの愚か者ぐらいだが、自分は婚約破棄された悪役令嬢なのだから問題ない、とリリーは満足げに頷く。

「リリーちゃん、なんか性格変わった？」

「猫をかぶっていただけだろ」

この脳みそ筋肉男フレデリック・オリオールの言葉選びを、リリーはあまり快く思っていない。レディへの物言いを知らない男は死罪という法律があれば今すぐギロチンにかけられたのにと、リリーは顔を背けて溜息をつく。

「王家に嫁ぐに相応しいレディとして振る舞っていただけですわ。でもそれももう必要なくなった

ことですし、これからはありのままの自分で生きようと思いました。これが本当のわたくしだと思っただければよろしいですわ」

「……」

昨日の今日で話し方が変われば誰だっけ怪しむに決まっている。

フレデリックの言う『猫をかぶっていた』という発言は間違っている。リリーの急変を怪訝に思う気持ちもわかるが、これからはこうして生きると決めたのだから、軽蔑されようとうだつていい。そんな小さなことを気にしては悪役令嬢にはなれないのだ。

「話し方おかしいよね。リリーちゃんっぽくない」

「おかしくありませんわ！ わ、わたくしは元々、こういう喋り方ですよ！」

「子供の頃から知ってるけど、絶対違う」

「馬鹿っぽいぞ」

「馬鹿っぽい」。それはリリーが言われたくない言葉ベスト3に入るもの。リリーがどういった言葉を嫌うかわかっているくせにサラッとやってしまうのがフレデリック・オリオールという男だ。リリーの中で彼は「無神経男」と呼ばれている。

早く法整備をしてもらわなければ他の女性までこの男に傷つけられかねない。リリーはやることリストにフレデリックの断罪を追加した。

「とにかく来い」

「ですから、来てほしければ頭の一つでもお下げになつてはいかが？ あなたがそこまでなさるな

ら、従つてあげてもよろしくてよ」

男のプライドは常に雲の上にあり、地面に立つ女に頭を下げるなど面子が立たない行為だ。それをわかつていて、どうしても来てほしいならその頭を下げると、リリーはクロヴィスを挑発した。

腕組みをして顎を少し上げたリリーを、オリオール兄弟が困った顔で見る。

「……俺の部屋に来てく——」

「行きます！ 行きますわ！ さあ行きましょう！」

迷いなく頭を下げようとするクロヴィス。それに耐えられなかったリリーは、とつさに彼の額を両手で支え、それ以上は下げられないようにした。

クロヴィス・ギー・モンフォールが女に頭を下げる様など見ていられない。孤高の王族モンフォール家の長男が公爵家の娘に頭を下げるなど、あつてはならないことなのだから。

（ああ、私の馬鹿！ 弱虫！ 根性なし！）

そもそもあの堅物がなぜこんなにも馬鹿正直に頭を下げようとしたのかわからないリリーは、何か企んでいるのではないかと不安になつていた。

「ハーブティー、好きだったよね？」

「本当は甘つたるいチョコレートドリンクが好きなんですの。ハーブティーなんて味のない飲み物を好む女性がいると、本当に思っているなら驚きですわ。チョコレートドリンクにしてくださいさる？」

「クロヴィスは女がキャッキヤ言いながら貪るチョコは好まない。知ってるだろ」

「わたくしは食べますの。毎日毎日飽きもせず何十個も、その女がキャッキヤとはしゃぐものを

貪むさぼつてますのよ」

「でも、チョコレートはないからねえ」

「じゃあ結構ですわ。昨日の今日で話したい大事なお話とやらを聞いたらすぐに帰りますので、さあどうぞお話しなさって」

本当はハーブティーはリリーの大好物である。モンフォール家の用意するハーブティーは特に香り高く、ほんのり甘くてリラックス効果抜群の高級品。この部屋に呼ばれる時はいつも、クロヴィスとの退屈な会話よりハーブティーを楽しむにしていたぐらいだ。

（悪役令嬢ってチョコレートのドリンクが好きなのかしら？ 令嬢だからハーブティーぐらい飲むよね？ もらえば良かったかな）

セドリックの申し出を突っぱねたものの、まだ掴みきれていない悪役令嬢キャラのせいで大好物を逃したことをリリーは若干後悔した。

「俺は昨日、お前に婚約破棄を言い渡した」

「ええ、驚きましたわ。婚約破棄よりも、まさか他人への敬意の払い方も知らない方が王子だったなんて、と。あれではまるで見世物でしたものね。モンフォール家の跡取りであるクロヴィス・ギー・モンフォールに切り捨てられたわたくしは、父からそれは酷ひどいお叱りを受けましたのよ。あなたの心変わりにはあなたの浮気心のせいではなく、わたくしが至らなかったせいだと」

「そうか」

（そうか？ そうかって言った？）

肯定こそしていないが、否定なきは肯定も同然。これは男女の脳の違いによる認識の不一致ではなく、幼い頃より王となる存在であれと叩き込まれ、彼を見下す者も存在せず、常に彼の意見が正しいとされる世界で育ったせいだと、リリーはわかっていた。

そして、自分が抱えているこの感情が、爆発寸前の怒りであることも同時に確信する。

「だが悲しんではいないだろう」

「そのようなこと……。あと一年で結婚だと思っていたのに、突然婚約を破棄されて、驚きと悲しみで昨夜は眠れませんでしたわ」

実際はノートに悪役令嬢らしい台詞せりふと行動を書き出していたせいで眠れなかったただだが、リリーは涙の滲にじまない目元を押さえ、バレバレの嘘泣きをして見せた。

「そのわりには肌艶はつやが良く、充血も見られないが？」

「一晩眠れなかったぐらいで悲愴がるような、悲劇のヒロインじゃありませんのよ。オーツホッホッホ！」

初めての悪役令嬢っぽい笑い方に、使う場面が理想的ではなからうかと、リリーはニヤつきそうになるのを堪こらえる。

「俺が聞きたいのはただ一つ。お前はなぜあの時笑った？」

「あの時？」

「俺が婚約破棄を告げた時だ」

言われてようやく、自分が満面の笑みで婚約破棄を受け入れたことを思い出した。

リリーは、今回の婚約破棄を前々から予想していた。悪役令嬢ものの小説を読んでいたことも理由の一つではあるが、女の勘でもそれはじゅうぶんに感じ取れた。

転入生として現れた貧民街出身の娘が、いつの間にかクロヴィスの横に立つようになり、リリーが気付いた頃には二人は何かを疑いたくなるほど親しくなっていた。

愛らしい笑顔と小柄な背丈はたいいていの男が守ってあげたいと思うだろうもので、「彼女」が現れてから、リリーはクロヴィスからお茶に誘われる機会が減り、「彼女」とお茶をしている彼の姿を見かけることが多くなった。

そして何より、この春に行われたパーティーでは、明らかにリリーより「彼女」と話している時間の方が多かった。

これらを経験しながら、自分は婚約者だからと胡坐をかき続けるほど、リリーは馬鹿な女ではない。そのため、近いうちに婚約は解消になるかもしれないと、覚悟していた。

故にリリーは、婚約を破棄してもらえれば悪役令嬢として理想的なスタートが切れるという、目論見通りになった状況に、つい笑顔になってしまったのだ。

「俺達の婚約は親が決めたもので、俺達が愛し合って決まったことではない」

「そうですね」

「それなら、なぜさつさと言い出さなかったんだ？」

「何をでしょう？」

「婚約解消をだ」

クロヴィスが何を言っているのかすぐには理解できなかったリリーは、ポカンと口を開けたまま数秒固まってしまった。

親が決めた王族との婚約にどうして自分が、公爵の娘が、解消など言い出せるのか。

クロヴィスはリリーの父親がどんな性格かをよく知っているはずなのに、それこそ「なぜ」リリーから婚約解消を言い出せると思ったのかが謎だった。

「笑うほど嬉しかったか？」

あの時と同じように笑顔で『はい!』とは言えない。

まさか愛読していた悪役令嬢本の展開と同じように、大勢の前で婚約破棄を突き付けられたのが嬉しかったなんて、言えるはずがなかった。

「そんなの……泣きたくなかったからですわ。父は泣いて縋りつけとわたくしに怒鳴りましたが、心変わりしたあなたをどうして引き留められますの？ 皆の前で婚約破棄を言い渡すということは、それは嘘や冗談ではないということ。わたくしにできることは、みつともない姿を晒すことではなく、しっかりと現実を受け止めて笑顔でいることだけだったのですわ」

嘘と本音が半分ずつ。

これが愛しい婚約者が相手であれば、数日間泣き続けていたかもしれない。しかし、リリーとクロヴィスの意思による婚約ではない以上、愛情が芽生えることはなかった。愛情がない関係に心変わりがあるのは当然のことだと、リリーは理解している。

「お前は——」

「そんなことより、今日はエステル様はいらっしゃいませんか？」

「……ああ、呼んでいないからな」

「そうですか」

貧民街出身のヒロインが姿を見せてくれれば、悪役令嬢への道をもう一段階ステップアップできるのに、どうして大事なこの場にいないのか。

クロヴィスに呼び出されたことも不満だが、それよりも、ヒロインが同席していないことの方がずっと不満だった。

（ヒロインはいつも主人公の傍にいなきゃ話が進まないのを知らないの？）

苛立ったリリーは、本当に最後まで現れないつもりかと、狭くはない室内を見回す。

「——クロヴィス様！」

「……エステル、なぜ来た。ここには来るなど言っていただろう」

「リリー様がご一緒だと伺って……その……」

（来た、来た来た来た！）

彼女が登場。来るなど言われていたのにやってくる。それでこそヒロイン。

彼女——エステル・クレージュは、貧民街出身でありながら貧しさや卑しさを感ぜさせない。リリー達令嬢に混ざっても違和感のない制服の着こなしか、それとも化粧のおかげかはわからないが、控えめな声で遠慮がちに話しかけ、体の大部分は部屋の外にあるのに顔はしっかりと中に入っていて、眉の下がった上目がちな視線。これぞまさにヒロインの行動だと、リリーは思わずガッツ

ポーズしそうになった。

こういう展開がなければ綿密に立てた悪役令嬢計画がダメになってしまう。リリー的にはどんどん前に出てきてほしかった。

「あら、エステル様ではありませんか。ごきげんよう。ちょうどエステル様のお話をしていたところですよ」

「え、そうなんですか？ リリー様とクロヴィス様が揃って私の話だなんて、恐れ多いですよ」

話の内容までと言っていないのに良い話と解釈したようでパアツと表情を明るくする。そのままちゃっかり部屋の中に入ってくる辺り、なかなか図太い人物らしい。

「あなたが卑しい貧民だという話をしていましたの」

「え？」

「リリー」

（ここが、ここが私の悪役令嬢としての意地の悪さの見せどころよ。準備は万全。舞台は整い、役者は揃った。プランBからプランAへ移行する！）

相手もないのに予習し続けた成果を見せる時だと、リリーは頭の中にある【悪役令嬢ノート】を開いてプランAに“実行”の判を押す。

「一緒に来てほしいと彼に頭を下げられて、渋々この部屋にやってきました。誰かから聞いたのか、それとも陰から盗み見ていたのかは知りませんが、わざわざ部屋まで来て顔を覗かせるなんてあざとい真似が、よくできますよね」

「あざ、とい？」

「わたくしを部屋に招いたことが心配だったのでしよう？ 可能性は低いけれど、婚約破棄を撤回するかもしれない。もしくはわたくしが泣いて縋^{すが}りつき、彼が考え直すかもしれない。そうなったら必死に奔走^{ほんそう}して取り入った自分の立場がなくなってしまうものね。ふふふっ」

どんなことがあるうと王子に失望されるような人間にはなるなど教育されてきたが、悪役令嬢になれる楽しさを考えると、そんな教育はもうどうだっていい。ただ、扇子^{せんす}を用意していないことだけが悔やまれた。発注はしたがまだ届いていないのだ。

「わ、私、そんな心配は……」

両手を握りしめて小さく震える姿は、悪役令嬢にイジメられるヒロインそのもの。こんな場面を父親に見られでもしたら勘当ものだが、今更やめようなどと思うはずもない。

ずっと懂^われていた存在に自分が今なろうとしているこの高揚感を手放すことはできない。性格が悪い、猫かぶり、性根が腐っているなどと言われようと、進み始めた足を止めるつもりはなかった。「クロヴィス様……」

いつの間にかしれっとクロヴィスの隣に腰かけたエステルが、クロヴィスの袖を摘^{つま}み、今にも泣き出しそうな顔で助けを求める。そんな、リリーが何度も小説で読んだようなシーンがそこに再現された。

「リリー、侮辱はやめろ」

エステルの前に腕を出し、庇^{かば}うようなポーズでリリーを止めるクロヴィス。

これがヒロインであればクロヴィスの反応に傷付き涙を滲^{にじ}ませて部屋を飛び出すのだろうが、それはあくまでもヒロインの行動であって、悪役令嬢はそんな行動には出ない。

リリーにいたっては泣くどころかむしろ、悪役令嬢ポジションに立てたことへの興奮で、呼吸が乱れそうになっていた。

「男性に取り入るのがお上手ですね。よろしければわたくしにもやり方を伝授してただけませんか？ ああ、できませんわね。天性の才能ですもの」

「酷^{ひど}い……ッ」

クロヴィスの胸に顔を寄せ、肩を震わせて泣き出したエステルの小さな背中に、長い腕が回る。ヒロインたるもの、いつ何時も涙を忘れてはならない。その点、リリーは婚約破棄の時に涙どころか笑顔を見せてしまったため、自分は最初からヒロインには向いていなかったのだ。エステルの様子に大いに納得した。

「王子、話は以上ですか？」

「……ああ」

「では、わたくしはこれで失礼いたしますわ」

悪役令嬢は去り際にも余裕を持つこと。感情を乱さず、泣くヒロインの傍を華麗に去る。それが、理想の悪役令嬢。

「フレデリック、送ってやれ」

「結構ですわ。ブリエンヌ家とモンフォール家はもうなんの関係もありませんもの。あなたとわた

くしも今日から、いえ、昨日からすでに赤の他人。ですので今後、もしわたくしの姿を見かけても、話しかけてくださなくて結構ですわ。浮気男と話すことなど何もありませんし、顔も見たくありませんから」

「リリー」

「さようなら」

リリーは、自分でも驚くほどクロヴィスに未練がなかったことに、少し申し訳なさを感じていた。親が決めた婚約なのだから愛情などなくても仕方ないが、ここまで相手を想う気持ちがないとは思っていなかった。ほんの少しは胸が痛くなったりするかと思っていたのに、エステルがクロヴィスに抱きついた時でさえ、何も感じなかったのだ。

思ったのはただ一つ。『エステルは素晴らしいヒロイン気質の持ち主だ』ということだけ。

リリーは今日、悪役令嬢の素晴らしさを身をもって知った。

こんなにスツキリとした別れが訪れるなんて思ってもいなかった。

婚約解消されただけのブリエンヌ公爵家長女リリー・アルマリア・ブリエンヌだったら、あんなことは絶対に言えない。ちゃんとクロヴィスの話を聞いて、彼を理解しようとしたはず。

それがあんな無礼な言葉を臆^{おく}することなく言えたのだから、役になりきることの凄^{すご}さを痛感していた。

（抱きしめてた）

スツと当たり前のように、守るように回された腕。自分が彼に抱きしめられたのはいつだったか、

そもそも抱きしめられたことが一度でもあっただろうか。思い出そうとしても出てこない。

（ま、クロヴィスも私と同じだったってことよね）

好き合っていないかったのだから浮気もわかる。公爵令嬢から乗り換える相手としてはエステルの身分は最悪だが、それともう自分には関係ないことだ。

「疲れたあ……」

「また靴を脱ぎっぱなしにして。制服も、脱いでたんでからベッドに上がってください」

「少し休んでるだけ。今日はまだすることがあるの」

「せめて制服を脱いでからにしてください」

悪役令嬢が、ただ高笑いをするだけのキャラクターではない理由が、なんとなくわかった。

今日、ああした態度を取ったことへの後悔は微塵^{みじん}もないが、それでも、心配で顔を覗かせたエステルを一方的に傷付ける必要はなかったような気もしていた。あの唐突すぎる侮辱は、凜^{れん}とした悪役令嬢の行いではなく、ただのいじめっ子だったかもしれない。

悪役令嬢にも色々な性格の持ち主がいるように、リリーも自分がなりたい姿をハッキリ描かなければならない。今後の課題が見つかった以上、今日もまた机に向かって夜更かしすることが決まった。

「アネット、私とクロヴィスって何か婚約者らしいことはしてた？」

「いいえ、何も。いつも退屈そうにお茶をしましたね。お嬢様は本を読み、王子は政治の話をし、次の逢瀬^{おづせ}の時間を決められて別れる。愛の冷めた夫婦のようでしたよ」

「そうよね……」

愛情など欠片かけらもないのだから、それに不満を感じたことはなかった。もしひと欠片かけらでも愛情があったなら、自分を見てくれないクロヴィスに怒ってリリーから婚約解消を口にしたかもしれない。怒りさえ込み上げなかったのは、冷める愛もなかったからで……

思えば、エステルのようにクロヴィスに抱きしめられたり甘えたりということは一度もなかった。だから、自分と比べてクロヴィスの体温が高いのか低いのか、手は大きいのか小さいのか、抱きしめる腕の力は強いのか弱いのか、リリーはそんなことさえ知らなかったし、知ろうとしなかった。父親が言う“足りない努力”とはそれだったのかもしれないと、今になって気付く。しかし、氣付いたところで次の機会は存在しない。もう婚約者という関係は終わったのだ。

「ところで、旦那様が次の婚約者探しに奔走ほんそうしておられるのはご存知ですか？」

「嘘でしょ？ 早すぎるわ！」

「悪役令嬢、ごっこを満喫している時間はないかもしれませんね」

「嫌よ！ 始まったばかりなのにまた相手に合わせるなんて、そんなの嫌！」

しかし、リリーの父親の性格上、娘の待ったなど聞いてくれるはずもなく、翌朝には目の前に座る父の姿が見えないほど高く、数えるのも嫌になる量の見合い写真が積み上げられた。

「どれがいい？ お前が好きなものを選ばせてやろう」

「ジョッピングではありませんのよ」

「今度は面倒がないよう、次男を選んだぞ。顔良し家良し、まあ性格に難がある男もいるが、そこはお前と同じ。お前が上手くやればいいだけの話だ。今度こそ、な」

「そんなところに娘を嫁よめがせるなんて、不安じゃありませんの？」

「お前が王子に婚約破棄を言わせたせいだ。反論ではなく反省をしろ」

「わたくしのせいではありませんわ！」

「その馬鹿みたいな喋り方をやめろ！」

フレデリックに続き、二度目の“馬鹿”。これは悪役令嬢の基本の喋り方しゃべりかたであって、馬鹿な子のように喋しゃべっているわけでは決していないのに、女心がわからない男は口を揃えて『馬鹿』と言う。

言葉は人が持てる中で最大の武器だと言われているのを知らないのかと噛みつきたい苛立ちを、リリーは笑顔を貼りつけることで堪こらえた。

「わたくしはこれからこの喋り方しゃべりかたで生きていくと決めましたの！」

「馬鹿を言うな！ お前は父親に恥をかかせたいのか！」

「娘を恥だと思うのですか？」

「そんな馬鹿みたいな話し方をする娘を恥だと思わん親はおらん！」

これがなければただの嫌味な人間になってしまうのだが、こうするに至った経緯を話しても、理解してもらえなければ意味がない。その理解力が自分の父親にあるとは思えず、リリーは説明を諦めて顔をしかめるしかなかった。

「おはようございます、リリー様」

「おはようございます」

登校前に父親とやり合ったおかげで、既に疲労困憊（こんぱい）のリリー。

こんな日は学校になど行かず、部屋に閉じこもって悪役令嬢が活躍する小説を読み耽り（ふけ）たい。しかしそんなことをしているのがもし父親にバレでもしたらと思うと、考えただけで恐ろしい。そのため笑顔を貼りつけて登校したわけだが……

「リリー」

「……冗談でしょ……」

昨日のことが夢でなければ、昨日リリーは間違はなくクロヴィスにハッキリと伝えたはず。もし姿を見かけても声をかけるな、顔も見たくないと。

それに、ずっと言ってみたかった台詞（せりふ）を言えた感動に身体が震えたあの感覚が夢であるはずがないと、リリーは首を大きく横に振る。

「リリー、話を——」

「王子、わたくしのことはこれからブリエンヌ嬢とお呼びくださいませ」

「なぜだ？」

「わたくしとあなたが他人だからですわ」

「婚約者ではなくなったが、幼馴染（わらわなじみ）だろう」

「幼馴染は他人ですよ」

「リリー、昨日の話を——」

「結構ですわ！」

昨日話をしたという出来事は覚えていても、その内容は忘れていらしい。多忙な毎日だからクロヴィスも疲れているんだと理解を示し、リリーは足早にその場を後にした。

正直に言うと、悪役令嬢としては王子という存在はどうだっていい。リリーが読んだ小説の中には叶わぬ恋に身を焦がしてヒロインをイジめる悪役令嬢もいたが、リリーは叶わぬ恋をしたのではなく婚約破棄をされただけ。

対王子用のプランを練っていないため、相手にしたくないというのがリリーの本音だった。何より、今まで微塵（みじん）も感じなかった「疲れる」という感覚に支配されている今、できればクロヴィスとは話をしたくなかった。

「皆さん、おはようございます」

教室に入ると、リリーはいつもと雰囲気が違うことに気が付いた。いつもなら返しきれないほどの挨拶の聲がかけられたのに、今はパラパラとしか聞こえてこない。それらの声はどれも小さく、誰一人リリーに寄ってこない上、向けられる視線が変だった。

怪訝（けげん）に思ったリリーが室内を見渡すと、何事かと聞くまでもなく、原因はそこにいた。

「リリー様！ 昨日は大変失礼いたしました！ クロヴィス様と大切なお話をなさっていたのにお部屋を訪ねて、私なんかに中断されてしまったことで気分を悪くされましたよね」

「いえ、いいんですよ」

「皆さんが親切にしてくださることに甘えすぎていたんだって気付きました。私、親切を受け取っていただけで、取り入ったつもりなんて全然なくて。あざといつもりもなかったんですが、リリー様にはそう見えていたのですね。これからは気を付けます」

小説の中でよく見る「息を吞む」という行動を、リリーは初めて自分で経験した。

リリーが来るまで、エステルはきつと昨日のことを歪曲してクラス中に言いふらしていたのだろう。

大きな瞳を必要以上に潤ませて口元を手で覆い、震える。

昨日も今日もそんなに震えて筋肉痛にならないのかとどうでもいい疑問がリリーの頭をよぎるが、さすがにここでそんな無神経なことを聞くわけにはいかない。

「私は確かに貧民街の出で卑しい身分かもしれませんが。でも、貧民街出身の人間が全て卑しいような言い方はなさらないでください」

今は関係のない話をあえてここで暴露するとは、なんとも賢いヒロイン。

自分を犠牲にしたような言い方で好感度を上げ、全員の前でリリーの言動を晒すことでその評判を落とすという、なんとも隙のない作戦。

（皆の前で堂々とやるって凄い。あざといつもりがないって言ったそばからあざといんだから凄いわ）

しかし、これでエステルがしてやったりと思っているのであればそれは大間違いだ、リリーは笑顔を見せる。リリーにとって今の状況はご褒美であって、窮地にはなりえない。

こうして立っているだけで勝手にリリーの評判を落とし、悪役令嬢への道を歩ませてくれるのだから感謝したいくらいだ。

「傷付けてしまったのなら謝ります。ですが、部屋に来るなどという王子の命令を無視して部屋を訪ねるのは感心しませんわね。わたくしとクロヴィス様が二人きりになるのを心配してのことでしょうけど、婚約者でも恋人でもないあなたが間に入っていることではありませんのよ」

「え、ええ、ですから謝罪を……」

「それから、王子が入っていいと許可を出していないのに中へ入って居座るのも、どうかと思いますわ」

「も、申し訳ございません……!」

「あのような常識外れな振る舞いをなさる方は初めて見たものですから、貧民などと度を過ぎた言い方をしてしまいましたの。そのことについては謝りますわ」

周りの生徒が放つ異様な雰囲気、リリーは顔を動かさないよう視線だけを周囲の生徒に向けた。男子生徒達が怒りを滲ませてリリーを睨んでいるのは勘違いではない。それだけ、リリーよりもエステルの人気が高いことだ。

（きつとこうして私は皆から軽蔑の目を向けられ、これからは一人ぼっちで過ごすことになるのね。すれ違い様に何か言われたり、陰口を叩かれたり、実は最低な女だったとあることないこと噂を流されて、それでも己が道を行く。そんなストーリーが浮かんでくるわ！ ああ、楽しみで仕方ない!!）

期待でニヤつきそうになる□元を、リリーは届いたばかりの扇子せんすを広げて隠す。

「そろそろ授業が始まりますので席に——」

「リリー様はそのようなお方ではありません！」

「え……？」

まずは上々の出来、とエステルを解放しようとしたところで、ふいに女子生徒せうしせいに遮られ、思わずリリーの口から間の抜けた声が漏れた。

「そうです！ もしリリー様がそのようなことをおっしゃられたのだとしたら、それはエステルさんがそれだけ非常識なことをしたからです！ この学園では紳士淑女としてのマナーを学ぶ授業があります。この学園にいる以上はそれに基づいて行動すべきです。にもかかわらずそれを学ばず、無礼な行いをしたエステルさんに問題があると思います」

誰かが庇かばってくれる展開なんて想像もしていなかった。皆に見放されて一人ぼっちになりながらも悪役令嬢として強く生きていく……つもりが、これはリリーの台本にはなかったことだ。

何か策はないか？ もっと侮辱の言葉を、と思っても、焦りで回らない頭では「貧民」というワードしか出てこない。それではあまりにも語彙力ごいりきょくに欠け、エステルだけでなく、エステルと同じような境遇の人間をも侮辱することになってしまう。

リリーが悪役令嬢として接する相手は婚約者を奪ったヒロイン——すなわちエステルただ一人。無関係の者まで攻撃するつもりはない。

「庇かばってくださいありがとうございます。でもいいのです。私がそう言ったことは確かですし、

庇かばっていたかどうかのようなことは何も——」

「腹が立てば誰だって普段言わないことも言ってしまうものです。リリー様がお優しい方であることは皆が知っています。私達はリリー様の味方ですから！」

「あ、ありがとう、ごさい、ます……？」

（なぜこうなってしまうの？ ここは全員が私をひそひそとけなしながら散っていく場面なので、は？）

あんな嫌味な言い方をした人間になぜ味方が出てきてしまうのか、リリーには全く理解できなかった。

「リリー様、ランチご一緒しませんか？」

「あ、今日はバラ園で人とお茶をする予定なのでごめんなさい」

「そうですか。ではまた午後に」

「ええ」

午前の授業は全く頭に入ってこなかった。

リリーの予定では『差別する人だとは思わなかった』『あんなに良い子のエステルちゃんに優しくできないなんて心の狭い女だ』『公爵令嬢だからって言いたい放題ね』とかなんとか、ひそひそと言われるはずだった。それが少しも上手く進んでいない現実に一瞬心が挫くじけそうになったものの、男子生徒の目は予想通り冷たくなったので、これはこれで成功したと言えるのかもしれないと前向

きに考えることにする。

予想外だったのは女子生徒の中に元々エステルを快く思っていない者が多かったということ。リリーから離れていかなかった生徒は思った以上に多かった。

「まだまだ悪役令嬢と名乗れる日は遠そうね……」

「——キャアッ！」

「キャッ！」

ランチを食べながら今後の行動を考えようと、構内にあるバラ園の入り口に着いた時、リリーはドンツと何かにぶつかり、続けて悲鳴のような声と何かが地面に落ちる音を聞いた。

リリーも思わず一緒に悲鳴を上げ、ぶつかった相手に顔を向ける。

「……あら、エステル様」

「リリー様……」

「だいじょう——」

「きゃあああああ！ ごめんなさいリリー様！ 申し訳ございません！」

「え？」

お互いそこまで強くぶつかっていないはずなのに一人尻餅しりもちをついているエステルが、急に騒ぎ出した。

バラ園は多くの生徒がランチタイムに利用する人気の場所。今の時間帯は、従者を引き連れた令嬢令息達が優雅に歩いている。

エステルの喚わめく声は、自分の自慢話と他人の噂話にしか興味がない彼らの足を止めるにはじゅうぶんで、リリーとエステルの周囲にはすぐになんだなんだと人が集まり始めた。

「ぶ、ぶたないでください！ お許しください！」

「え？ ぶつ？」

「申し訳ございません！ クッキーを焼いたのでクロヴィス様にお届けしようとしていただけなんです！」

エステルがどこへ何をしに行こうとしていたかはどうでもいいし聞いてもない。

リリーがエステルへ手を伸ばしたのはぶつつもりではなく助け起こそうとしたからなのだが、エステルの大袈裟な演技により、人によってはリリーが彼女を叩こうとしているように見えただろう。

「私がクロヴィス様にクッキーをお届けするのが気に入らないのですね……」

「え、いえ……あ」

もしかして、エステルは自分の企たくらみを知っていて協力してくれているのではないか、とリリーが勘かん繰くってしまうほど上手く状況を運んでくれる。ならばこれを利用しない手はない。これは自分と与えられた、またとない機会。

これはヒロイン自ら運んでくれた、悪役令嬢への更なるステツプアップのチャンス。拾わなわけにはいかないと、咳払いをしてから顎あごを少し上げ、見下す表情を作った。

リリーの足元には、内容が一目でわかる透明の袋にピンクのリボンでラッピングされた、見るからに手作りのハート型クッキー。

手作りという時間と手間のかかる作業をしたことは女として見習うべきところであり、その努力は称えられるところでもある。

しかし、リリーとしては今はそのどちらでもなく、その手間と努力を踏み潰すべき時なのだ。まるでゴミでも拾うように親指と人差し指で袋を摘み上げ、それを嫌そうな表情で見やる。

「ええ、気に入りませんわね。彼とはまだ歩き始める前からの付き合いで、わたくしは彼の全てを知っていると言っても過言ではありませんの。彼はチョコやクッキーは好みませんのに、それを差し入れるだなんて……ふふつ、何もご存知ないのね。この際だから教えてさしあげますわ。貧民街ではこんなあざとさ丸出しのハートの手作りクッキーを渡すだけで男をゲットできたのかもしれないけど、残念ながら貴族は手作りなんて不気味な物は、受け取らないんですよ」

「持てる者は与え、一切の差別をしてはならない」という学園の教育のモットーを破る発言も忘れない。

これは我ながら悪い女を演じられた、褒められるレベルだと、リリーは自分の演技力を心の中で称賛した。

「どうしてそんな酷いことが言えるのですか！ 私はただ、お疲れのクロヴィス様に少しでも癒しをと思つて……」

「よくもまあそんな押しつけがましいことが言えますわね。彼の立場を考えれば、邪魔をしないことが一番に決まっていますわ。あなた一人が子供のように浮かれています間にも、彼は休む間もなく仕事をしていますのです。そんな中『あなたのためを思つてハートのクッキーを作ったんです。どう

ぞ食べてください！』なんて馬鹿な犬のように尻尾を振る女の相手をしなければならないことがどれほど負担になるか。そんなこともわからない女がくつついて回るなんて、彼には同情しますわ」
実際、リリーはクロヴィスが休んでいる姿をほとんど見たことがない。いつも何かの書類に目を通していた。そんな彼でも、リリーとお茶の時間だけは書類に触らず話をしてくれる。それでも話題は結局は自分が関わる政治の話だったわけだが。

しかしリリーは婚約者として、政治に参加はできずとも把握しておくぐらいは当然のことと思つて話を遮ることはしなかったし、邪魔になるような行動もとらないようにしていた。

クロヴィスの肩にかかっている重圧がどれほど大きいものかも知らず、軽々しくクッキーの差し入れに行こうというエステル的行為は、婚約者でなくなったりリリーにはもはやなんの関係もない。にもかかわらず、その軽率さを少し咎めなくなったのは、厚意ではなく事情を知っている者としての気遣いからだ。

「リリー様がそんな酷い方とは知りませんでした！ そんなだからクロヴィス様に愛想を尽かされるんです！ クロヴィス様、言つてましたよ！ あいつは笑わないから可愛げがない、女は可愛げがなければ終わりだよ！」

（ああ、だから……）

エステルの言葉でクロヴィスの謎の発言の意図がわかった。

「確かにリリー様はクロヴィス様のことをよくご存知かと思いますが、もう婚約者じゃないんですよ？ なのにこうして私を責めるのは、今も未練があるからですか？ だから私にこんな酷いこ

とを言っ——キャッ！」

パンツと乾いた音が響くと共に、立ち上がりかけていたエステルの顔がそっぽを向く。突如現れた柔らかなそうなピンク髪がリリーの目の前で揺れた。

「口を慎みなさい、貧民」

「リアーナ様!?」

叩きつけるような口調でリリーとエステルの間に入ったのは、リアーナ・ブロワ侯爵令嬢だ。

気位が高いことで有名な令嬢。物怖じせず、周りの目も気にしないリアーナは、リリーよりもずっと悪役令嬢に相応しい性格で、吊り上がった目は睨まれただけで背筋まで凍り付きそうなほど冷たく、彼女に逆らう者はほとんどいないと聞く。

そんなリアーナ嬢がまさかエステルにピンタをぶちかますなど、誰も予想できなかっただろう。

「私達貴族がなぜ手作りの物を食べないかわかる？ どこで何を触ったかわからない手で作るからよ。何が入っているかわからない物を口にするわけじゃないでしょう。だから私達には信頼できるシェフが専属でついているの」

「怪しい物など入れてません！ いつも手はキレイに洗っています」

「自分の顔が映るまで磨いた道具をお使い？ 学園の備品だとしても、あなたと私達の衛生管理の基準が同じとは思えないわね」

しまった。ここは貴族の集う場所。物の考え方に関してはほとんどの生徒がリアーナに賛同し、エステルの叫びなど受け入れられない最悪の状況になりつつある。



周囲の女子生徒達は声を潜めて隣の生徒と話し、エステルに冷たい視線を向けている。男子生徒すら、リアーナの言葉に腕を組んで頷いていた。

この状況ではリリーが上手く立ち回らなければ、たぶん事態は――

「何事だ」

悪化する――

「クロヴィス様！」

「キャアッ！」

ヒロインが誰かを突き飛ばして王子に駆け寄るなどという場面は、今まで読んできた悪役令嬢本どころか恋愛小説でも見たことがない。

ヒロイン候補であるエステルはリリーが思うよりもずっと図太い神経の持ち主らしく、突き飛ばされたリアーナをリリーが王子のように受け止めるという異例の状況が出来上がっていた。

「リリー様が私を突き飛ばしてクッキーを踏みつけたんです！」

その言葉に目をやると、いつの間にかリリーの手からクッキーの袋がなくなっている。それどころか、リリーとクロヴィスの間で粉々に砕けていた。

クロヴィスの胸に顔を寄せたエステルに素晴らしいまでに歪曲された話は、その状況を見ていなかった人々を信じさせるにはじゅうぶんだろう。

「クッキー？」

「クロヴィス様にクッキーの差し入れをしようと思って、一生懸命作ったんです。それなのにリ

リー様は私がクロヴィス様にクッキーを差し入れることが気に入らないみたいで、突き飛ばされて……」

「あなたさつき自分で踏み――」

エステルを遮ろうとするリアーナをとっさに止める。

エステルを悪者にすることだけは避けなければならない。放っておけば簡単に立場を逆転されてしまいそうで、そうなればリリーの人生設計が水の泡となってしまう。それだけはなんとしても避けたい。リリーは自分が悪役を演じることでエステルをヒロインに仕立て上げたいのに、リアーナが邪魔をしようとする。

「リリー様！」

「いいんです。リアーナ様が庇^{かば}ってくださっただけでじゅうぶんですから」

「でもあれは――」

「ありがとうございます。さ、ランチの時間が終わってしまいますわ。行きましょう」

庇^{かば}われるのはヒロインの役目であって、悪役令嬢の役目ではない。

リリーの誤算は、周りの目が全てエステルに注がれているにもかかわらず、誰も彼女を庇^{かば}おうとはせず呆れた目を向けていたこと。

教室にはあれだけエステルの味方がいたのに、この場にエステルのファンはいなかった。

バラ園は学園内に作られたスペースで、誰もが平等に使えることになっている。が、暗黙のルールで高位の貴族しか訪れない。だからエステルに近い下位貴族の姿はなく、貧民街出身のエステ

ルを庇^{かば}おうとする者がいなかったのだ。

「リリー、本当か？」

「ええ、本当ですわ。手作りクッキーなどという蛮族^{ば蛮族}が好みそうな物を差し入れようとしていたので、注意していたところですよ」

「だから突き飛ばしたと？」

「突き飛ばしただなんて人間きの悪い。ヒールも買えない貧民が小さくて見えなかっただけですわ。そこら辺の太い木の枝でヒールでも作られてはいかが？ きつとお似合いだと思えますわよ」

クロヴィスの登場で野次馬のように集まっていた生徒達が去り、自身の評判を落とそうにも落とせない状況になった今、無駄に悪役令嬢^{あくやくれいじやう}ぶる必要はない。しかしせっかくだからと、リリーは木を指差しながらヒールを鳴らしてみせる。

「そもそもなぜあなたのような貧民がバラ園を通り道に？ あなたにはバラ園より排水溝の方がお似合いですのに」

「酷^{ひど}い……」

「さすがにその言い方はないよ」

「言いすぎだぞ」

「護衛はお黙り」

オリオール兄弟に口を挟まれると、せっかくの表情が崩れそうになる。

どちらも幼い頃から一緒に育ち、全てを知られていると言っても過言^{かごん}ではない相手だ。庭を走り

回る時も屋敷の中を走り回る時も、そうして怒られる時も一緒だった。

そんな二人にどこまでリリーの演技が通じるかはわからないが、酷^{ひど}いと言うのであれば信じているということ。

これはイケる、とリリーは拳^{こぶし}を握った。

「リリー、この学園の方針を忘れたのか？」

「あら、王子ともあろう方が貧民を庇^{かば}われるなんて、相当お気に入りなのですね」

「差別はするな」

「婚約者でもないのにわたくしに命令しないでくださる？ 不愉快ですわ」

「リリー」

わざとらしく大きな溜息を吐いて顔を背けると、地面の上で粉々になったクッキーが目に入る。リリーがゴミのように拾い上げた時にはまだ綺麗なハートの形を保っていたのに、本当にいつの間にかこうなったのか……。もしリアーナの言う通り、エステルが踏みつけて一瞬で自分の舞台を作り上げたのだとしたら、その判断力^{あはだち}は侮^{あなづ}れない。

「わたくしにお説教などしてないで、エステル様^{なぐさ}を慰めてあげてはいかが？」

「リリー待て。話があると言っ——」

「クロヴィス様！ 行かないでください！」

リリーを追いかけようと踏み出したクロヴィスに、エステルがしがみつく。それで身動きがとれなくなつたようで、リリーはその場を逃れることができた。

「上手くないものね」

予想では、今日のリリーは婚約破棄された可哀相な女扱いをされた後、婚約者を奪ったエステルに嫌味と高笑いをぶつけて悪役令嬢ボジションを勝ち取るはずだったのだ。それなのに、なぜか教室でもバラ園でもリリーを庇^{かば}う者が現れる。

お気に入りの台詞^{せりふ}を抜粋してエステルに使うこともできたというのに、いまいち悪役令嬢らしくないのはなぜか……

「——やっぱり何かあったんだ？」

「キヤアアアアッ！」

耳にかかった生暖かい吐息にリリーが思わず悲鳴を上げると、即座に口を塞^{ふさ}がれる。

「声がデカイ。手は離すが大声は出すな」

「ンンンンッ？」

フレデリックの言葉にリリーが頷くと、ゆっくり解放された。振り返ると、無表情のフレデリックと最初に声をかけてきたセドリックが並んで立っている。

「な、なんのつもりですの!？」

「そりゃこっちの台詞^{せりふ}だ」

「は？」

「態度があからさまに変わりすぎて怪しい」

それもそのはず。

リリーは悪役令嬢として生きることを決めたから、今までのように淑女を気取る必要などない。だが、それで怪しまれていつまでも付きまとわれるのは本意この上ない。

護衛である二人が護衛対象の傍を離れたということは、この行動はクロヴィスの命令だろう。

(なんで今更?)

リリーは不愉快そうな表情で二人を見る。

「そりゃクロヴィスに婚約破棄されちゃ頭がおかしくなるのも無理はないが、お前はそうじゃねえだろ」

リリーはおかしくなったのではなく、楽しんでいるだけだ。

「これまで差別は世界中からなくさなきゃって言ってたのに、急に彼女を貧民呼ばわりするなんてどうしたんだい？」

できれば答えたくない。二人の問いはきつとクロヴィスが聞き出そうとしていることだから。

今ここで答えれば全てに彼に筒抜けになってしまうだろう。彼がどういう行動に出るか予想もつかない今の状態では、下手をすると全てが台無しになってしまう可能性もある。それだけはなんとか避けないければならなかった。

「わざわざ人の口を塞^{ふさ}ぐという無礼な行いをした後に出てくる問いかけがそんなくないことですの？ 本当に呆れますわ」

「それはお前の本音じゃねえだろ」

「わたくしの何を知っていると言いますの?」

「大体全部」

返す言葉が見つからない。もっと子供の頃から悪役令嬢本が流行^はっていたら早くに手を打てたかもしれないのに。加えて婚約者がクロヴィスとあつてはリリーは品行方正に生きるしかなく、今更この二人を欺^{あだ}くには苦しいものがあつた。

「知ったような口を利^きくのはやめてくださる？」

「お前もその喋^{しゃべ}り方をやめたらどうだ？」

「お黙り！ わたくしの話をお聞きなさい！」

思わず取り乱してしまった自分のみっともなさにごホンと咳払いをするが、今の勢いと言ひ方は悪役令嬢っぽい気がする少し嬉しくなった。

「確かに、わたくしは婚約破棄でおかしくなったわけではありませんし、正直に言えば、ショックすら受けてはいませんの」

「だよな」

「相槌^{あいづ}はいりませんわ。いちいち腹が立つ言葉しか発しないその口を摘^{つま}まんで黙^もっていなさい」話が進まない。

「婚約破棄されることはなんとなく感じ取っていました。エステル様が現れてから、彼の興味は明らかに彼女に向いていましたもの。わたくしが彼に興味を持っていなかったように、彼もわたくしに興味を持っていませんでしたし、この婚約は親同士が勝手に決めたもの。最初から覚悟さえできていれば、ショックを受けることはありませんわ。そうでしょう？」

「その話し方やめろ。ムカつく」

「その言葉、そのままお返ししますわ」

「フレデリックじゃないけど本当に似合^あってないよ」

言葉遣いを指摘され続け、容姿を貶^{けな}されるよりずっと心が傷付いた。今すぐベッドにダイブして枕に顔を押し付けながら罵^{のの}詈^{のち}雑言^{ざつごん}を吐き出したい気分だが、ここは大人の対応で笑顔を保つ。

「で、公爵令嬢の口を押さえるという無礼極まりない死刑も同然の罪を犯してまで、何用ですの？」

「クロヴィスがお前の様子を見てこいと」

「婚約破棄した相手になぜ付きまといますの？ ストーカーに成り果てたいのかしら？」

「気になるんだろうねえ、君が」

「お二人ともお忘れのようですから教えてさしあげますけど、婚約を破棄したのは彼ですよ。なのに何が気になると？」

ショックを受けてはいないものの、屈辱は屈辱。無責任に恥をかかせておいて、今更なぜ付きまとうのか、リリーは理解できなかった。

「その割には嬉しそうだったよね？」

「恥かかされたのに笑うってマゾか？」

「フレデリックは口を縫い付けないとわからないようですわね？」

この男は脳みそまで筋肉でできているせいで、デリカシーというものを身につけることはできないらしい。